

機関番号：32635

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20320015

研究課題名(和文)

現代宗教性の類型化と受容可能性—体験談のデータベースとモニタリング調査—

研究課題名(英文)

The Typology and Acceptability of Modern Religiosity:  
Databasing and Monitoring Study of Testimonies

研究代表者

弓山 達也 (YUMIYAMA TATSUYA)

大正大学・人間学部・教授

研究者番号：40311998

研究成果の概要(和文)：

100 項目の宗教概念について日米の回答者に賛成か反対かを尋ねると、日米共通で信仰者のほうが非信仰者よりも賛成する共通概念が 90 も検出され、日米共通で生命主義的救済観が信じられているなど意外な点が多かった。教義と実際の信仰の乖離も検出された。さらに、1) 人格神への信仰、2) 教団宗教的規範、3) 超越への働き掛け、4) 大生命と魂、5) 現世利益、6) 感情の制御というお互いに相関する 6 つの共通概念群からなる日米共通の構造が検出された。それら共通概念群は、実践論的・顕教的か存在論的・密教的かという 2 つの独立したメタ因子からなるメタ共通構造に包摂され、有機的階層的な構造を成している。このうち、実践論的・顕教的なメタ因子のみが、信仰者の幸福度に対してプラスの効果を持つ。また、神に関する概念と幸福度の関係を調べると、人格的な神概念は幸福度にプラスの効果をもたらし、非人格(原理)的な神概念はマイナスの効果を持つ。

研究成果の概要(英文)：

A survey of almost 1400 people in the U.S. and Japan was carried out amongst religious believers and non-believers. They were asked to what extent they agreed or disagreed with one hundred concepts concerning religion; more than non-believers, believers agreed with ninety of these concepts. There were some unexpected and remarkable common points: the "Vitalistic Salvation" was believed in both countries; and deviations of belief from authentic dogmas were also found. Furthermore, we found a common structure consisting of six groups of concepts: 1. faith in a personal god; 2. religious norms; 3. action to transcendence; 4. a great life, and the soul; 5. this-worldly benefit; and 6. control of emotions. The groups are integrated into two meta-factors: practical/exoteric and ontological/esoteric. It is the practical/exoteric meta-factor only that affects happiness.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2009 年度	7,700,000	2,310,000	10,010,000
2010 年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
年度			
年度			
総計	14,200,000	4,260,000	18,460,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：体験談、データベース、モニタリング調査、宗教性、受容可能性

## 1. 研究開始当初の背景

宗教学研究において宗教的体験談は好んで用いられる題材であった。孝本貢 1980、渡辺雅子 1980、日野謙一 1982、島藺進 1986、弓山 2004 といった体験談研究では、回心としての体験談の物語構造、また教団活動や信仰体系全体の中における機能や位置を解明することに向けられてきた。しかしながら宗教性が宗教セクター以外の広がりを見せる昨今、従来のように体験談を宗教教団の出版物に限定して分析する意義は、それほど小さくなく、むしろ広義の体験談における宗教的体験談の位置づけなり、その類型化なりに注意が注がれるべきであろう。そのことは体験談を紙媒体に限らず「語り」として再指定した萩原修子 1994、芳賀学 1997、菊池裕生 1997、芳賀学・菊池裕生 2006 らの研究にも、同様にいえる課題である。

本研究では、非宗教的な体験談が広く一般に受容されていることに鑑み、それとの比較の中で宗教的体験談を類型化しその受容可能性を測定することが急務であるとの認識にたっている。体験談ブームの広がりに関する文化評論は散見されるものの、そこには明確な分類基準や指標は皆無といえる。また、従来の事例研究もその分類は思弁的・先見的基準に基づくものであり、実証的な分析は施されていない。それに対して本研究では、マーケティングリサーチやコンピュータサイエンスの最先端の手法を取り入れ、宗教的体験談の受容可能性や分類を厳密な統計的手法を用いた量的な測定で実証的に担保させることに特徴がある。そこでは人々の意識の実態を明快に提示することにこそ意義があり、従来の研究が提示してきた理論の妥当性を実証的に検証するとともに、従来の研究が見出しえなかった知見を得ることが期待される。

## 2. 研究の目的

現代日本において宗教に対する無関心と拒絶感が広がっている。その一方で「宗教に対する一般的な教養」という文言が教育基本法に盛り込まれるなど教育界で宗教知識や宗教的情操の必要性が議論され、医療・看護の現場で宗教者との協働が模索されているのも事実である。海外に目をやれば、例えばアメリカ合衆国では神を信じる人は 90%を越え、政治にも影響は大きく、日本以外の先進国では、宗教的価値観に基づく倫理性が人生や社会の基盤として認識されており、創造性に満ちた安心して暮らせる社会背景として機能している。日本でも、伝統宗教や伝統教団の有する倫理性や公共性が、健全な形で社会に受容されることが期待されていると

いえよう。

本研究では、こうした宗教性の正の資産に注目し、生活世界（あるいは人々の人生や日常生活）と宗教性の接点を具体的に記述する素材として「体験談」にアプローチし、宗教／世俗間のコミュニケーションの促進とインターフェイスに関わる理論構築のための実証的研究を志向するものである。この理論的・方法論的な革新に基づき、体験談の(1)多様性の分類化、(2)読み手が体験談を受け入れる度合いや評価といった受容可能性の測定、(3)体験談の諸要素のみならず、宗教の基本概念を従来の研究成果を踏まえて構造化することを目的とする。

## 3. 研究の方法

- ・2008 年度
  - ①約 1000 件のネット上の体験談のデータベース化とそのテキストマイニング
- ・2009 年度
  - ②募集体験談 9 件に関する読者 371 名の受容調査
  - ③執筆体験談 4 件に関する読者数 83 名の受容調査
  - ④宗教概念 100 項目に関する日米それぞれ約 700 名の宗教意識・理解度・受容度調査
  - ⑤書籍から宗教概念の抽出とツリー構造図による概念間の関連の検討
- ・2010 年度
  - ⑥上記⑤の諸概念について質問文による宗教意識調査
  - ⑦体験文 18 件に関する 日米それぞれ約 350 名の受容調査

## 4. 研究成果

### (1) 体験談の状態遷移

約 1000 件の体験談を検討し、①初期状態とそこにおける欲求(経済、肉体、人間関係、超越、自己実現)、②教義に基づく(宗教的)実践(祈り、祈り以外の修行、祭式供養、宗教者の相談や宣託、聖地の訪問や参拝、お守りやアイコン、寄付)、③結果状態、④結果状態への評価・解釈、⑤信仰・信念の変化の推移を抽出し、多様な体験談研究を同じ状態遷移の遡上で検討する基盤を得た。

### (2) 日米宗教性

次に本研究では、日米比較に先立ち、両国の異なる文化的文脈を架橋する宗教概念の統制を行う必要があった。そのため既存の宗教理論、特定宗教の教義、宗教教義に関する啓蒙書などを用い、複数の宗教概念間の関係をデータベース化し、質問文をデータベースに格納し、宗教概念と質問の相互関係を整理

した。こうして得られた100の宗教概念に従って日米比較を行ったが、その成果は本研究の中心をなすものであり、上記「研究成果の概要」に既述したので、本項では省略する。

### (3) 宗教概念のデータベース化

上述のように宗教思想を構造的・体系的に把握しつつこれを調査によって精緻化するための第一歩として、本研究では宗教思想のコンセプト要素を研究書・論文と啓蒙的概説書をもとに収集し、研究者の視点と市井の視点を統合しつつデータベース上に再構築して思想構造のツリー状表現を描出した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

- ① 渡辺光一・黒崎浩行・弓山達也、日米宗教概念の構造とその幸福度への効果—両国の共通性が示唆する普遍宗教性—、宗教と社会、査読有、17号、2011、pp.47-66
- ② 渡辺光一・弓山達也・黒崎浩行、素朴な体験談とそのコンセプトのコミュニケーションの研究の方法論、ことば工学研究会、査読無、34号、2010、pp.99-103
- ③ 弓山達也、日本におけるスピリチュアル教育の可能性、宗教研究、査読有、365号、2010、pp.349-373
- ④ 弓山達也、スピリチュアルブームを超えて、精神性の高みへ、第三文明、査読無、610号、2010、pp.28-31
- ⑤ 黒崎浩行・弓山達也・渡辺光一、日米宗教思想の再構築:思想空間法を用いた体系化の一例、情報処理学会研究報告人文科学とコンピュータ(CH)、査読無、87(2)、2010、pp.1-3
- ⑥ 渡辺光一・黒崎浩行・弓山達也、思想空間法—構造化手法と調査データを融合した思想・理念の体系化方法—、情報処理学会研究報告人文科学とコンピュータ(CH)、査読無、87(3)、2010、pp.1-4
- ⑦ 星川啓慈、ウィトゲンシュタインの〈神との和解〉—自己嫌悪する自分から〈あるがまま〉の自分へ、宗教学・比較思想学論集、査読無、9号、2009、pp.1-16
- ⑧ 星川啓慈、ウィトゲンシュタインの『確実性について』を心理学的視点から読む、大

正大学研究紀要、査読無、94輯、2009、pp.1-19

[学会発表] (計4件)

- ① 黒崎浩行・河野昌広・弓山達也・川端亮・渡辺光一、体験談研究における質的方法と量的方法との統合—概念と構造に注目した国際比較研究—、「宗教と社会」学会、2011年6月12日、北海道大学
- ② 河野昌広・弓山達也・川端亮・渡辺光一、体験談と宗教意識の研究、日本宗教学会、2010年9月4日、東洋大学
- ③ 渡辺光一・黒崎浩行・弓山達也、素朴な体験談とそのコンセプトのコミュニケーションの研究の方法論、日本認知科学会 文学と認知・コンピュータ研究分科会 II (LCCID)、2010年3月6日、マリオス (盛岡)
- ④ 島蘭進“From National to International Religious Cooperation: Peace Movements after the World War II and their Historical Background,” (国民的宗教協力から宗教の国際協力へ—戦後の平和運動とその歴史的背景)、IIAS(International Institute for Asian Studies)&国立民族学博物館(民博)シンポジウム、2009年8月12日、国立民族学博物館

[図書] (計1件)

- ① カール・ベッカー、弓山達也編、大正大学出版会、いのち 教育 スピリチュアリテイ、2009、314

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

弓山 達也 (YUMIYAMA TATSUYA)  
大正大学・人間学部・教授  
研究者番号：40311998

### (2) 研究分担者

星川 啓慈 (HOSHIKAWA KEIJI)  
大正大学・文学部・教授  
研究者番号：10173585

島蘭 進 (SHIMAZONO SUSUMU)  
東京大学大学院・人文社会系研究科・教授  
研究者番号：20143620

渡辺 光一 (WATANABE MITSU HARU)  
関東学院大学・経済学部・教授  
研究者番号：30329205

(3) 連携研究者

黒崎 浩行 (KUROSAKI HIROYUKI)  
国学院大学・神道文化学部・准教授  
研究者番号：70296789

大村 英昭 (OMURA EISHO)  
関西学院大学・社会学部・教授  
研究者番号：30047485